



ペットとして身近なイヌやネコは、飼い主にたくさんの幸せをあたえてくれます。でも、人間の都合で捨てられたり、飼いきれなくなったりして、施設に引き取られるケースも後を絶ちません。イヌとネコを保護している札幌市の動物愛護管理センターでは、やってくるネコが多くて頭をかかえています。こども記者まなっくの3人が取材しました。

(文・上田貴子、写真・浜本道夫)

保護ネコ100匹 パンク状態

「まなっく」は、まなぶんの「まな」と、「行く・聞く・書く」に由来する愛称です

こども記者 まなっく 見ぶん録



札幌のセンター 飼えないペット引き取る

訪れたのは、札幌市の南山旺介さん(菊水小4年)、山田うみさん(新川中央小4年)、村田遥香さん(共栄小5年)の3人です。このセンターは昨年11月中旬、札幌市内2カ所の動物管理センターを統合して、中央区にオープンしました。獣医師の市川敦嗣さん(34)が案内してくれました。

ネコの部屋に入ると、ケージにいたネコたちが「にゃー、にゃー」と鳴きました。「たくさんいるね」。南山さんはおどろいた様子です。札幌市は国のルールに基づいて、迷子や家庭でどうしても飼えなくなったイヌやネコを保護しています。昨年11月下旬、センターにはネコが合計約100匹、犬は2匹いて、パンクしそうです。

「ネコがたくさんいるのはなぜですか」。山田さんが聞きました。

市川さんは「ネコは赤ちゃんがでやすい動物です」と教えてくれました。メスの妊娠期間は約2カ月で、一度に4〜8匹出産します。野良イヌはほとんどいないけれど、野良ネコはあちこちにいます。ネコを拾って、赤ちゃんができないように手術をしない場合、1匹のメスから、2年後には80匹以上に増える可能性があります。

ペットが増えすぎて世話ができない状態を「多頭飼育崩壊」といい、最近は各地で問題になっています。札幌市は、昨年9月までの半年間に多頭飼育崩壊した家庭5件から合計156匹のネコを保護しました。

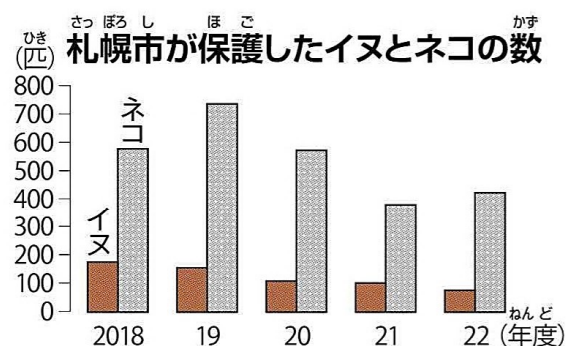
イヌは14年度以降、殺処分をしていません。ネコは年間1〜4匹、ねむらせてから薬で死なせています。市川さんは「交通事故などで大けがをしていたので、それ以上苦しめないためです」と言います。

取材を終えて、山田さんは「ネコが赤ちゃんを産んだら、それ以上増える前に、もらってくれる人を探さないと」、村田さんは「車を運転するようになったら、動物をひいてしまわないように気をつけたい」と話しました。

ケージに入った保護ネコを見学するまなっくの3人。左から山田うみさん、南山旺介さん、村田遥香さん。右は獣医師の市川敦嗣さん



保護ネコに聴診器を当てて、心臓の音を聞くまなっくたち



最後まで責任持つて

ペットを飼う前に、どんなことに注意したらいいでしょう。札幌市動物愛護管理センターの所長で獣医師の千葉司さん(55)に、まなっくの3人が聞きました。

千葉さんはまず「ペットにしたい動物の性格や習性を調べてください」と言います。犬は群れの中で自分の順位を決める習性があります。家族の中で犬が一番下と教えると、家族全員の言うことを聞くようになります。トイレや食事、散歩の時

に必要なしつけも覚えておきましょう。ネコはつめとぎしたり、毛玉をはいたり



千葉司所長(左)から話を聞くまなっくたち

します。飼う前につめとぎグッズや掃除の道具をそろえましょう。環境の変化に敏感なので、ゆっくりねむれる場所を用意します。

ペットを飼うには世話する時間のほか、えさや病院などにお金がいります。千葉さんは「ネコなら15年くらい生き続けます。最後まで飼い続けることができるのか考えてから、ペットを飼うようにしましょう」と伝えました。

南山旺介さんは「責任を持って飼うことが大事で、簡単に考えてはダメだと分かった」と話しました。